大阪国際中学校高等学校
WEBサイト・読み物
教職員のおすすめ図書
SEASON 2
Vol.09

疑問を持って、自分の考えを他の人に伝えて、能動的に動けるか。中学・高校はその考え自体を養っていくところでもあるのです。

英語科　**辻　潔**

プラグマティズム入門

ちくま新書
伊藤 邦武 著

―どんな中高生でしたか？なんで英語教員になられたのですか？

私自身、本当に活字中毒で、本がないと生きていけないような人間なんです。もう小学生の時からで、本が友達みたいな感じでした。学校でも休み時間は常に本を読んでるような少年でしたね。司馬遼太郎さん原作の大河ドラマを観たのがきっかけで、どんどんのめり込んで、歴史全般に興味を持ちました。そのあと、中高生の時期は主に小説を読んでいました。

大学では哲学を勉強しました。進路としては文学も視野には入れていたんですが、どうも古典にそこまで興味が持てなくて。こういう質問をされると、冗談で「源氏物語が肌に合わなかった」って答えるようにしています。笑。読書が好きで、小説を読むようになり、その次は詩、評論。そしたらやっぱり好きな方向性に突き進んでいくことになるわけです。それが私の場合は、哲学にハマっていくこととなりました。

今でいう中二病がもうどんどん深まっていって、「なんで生まれてきたんだろう」とか「生きていることに意味があるのか」とか。自己を見つめるという点では、中二病はまさに哲学の入り口です。自意識過剰だったんでしょう。まぁ、実存主義から入って、この辺を勉強するぞと思って、大学入ったんですけど、そこには今回紹介する『プラグマティズム入門』の著者であり、私の恩師となる伊藤邦武先生もいらっしゃって、また東大の倫理学教授、加藤尚武先生が特別講義をされるなど、まさに哲学や倫理学の世界では権威のある方たちのオールスター状態で、哲学を勉強するには本当に恵まれた環境でした。そこでイギリス経験論のデビッド・ヒュームという哲学者を専門で勉強してました。

大学を卒業した後は大学院に進もうと思っていたんですが、研究の道に入るのはなんかと違うなって。哲学を職業にするのは、なんかこう、何か違うなっていうふうに思い始めて、大学卒業後、イギリスのシェフィールドっていうところに2年留学をしました。1年間英語を勉強して、2年目でMA（マスターオブアーツ）というコースで哲学の修士号を取りました。

直接英語の教師をめざすきっかけになったのはこの留学でした。留学した時に感じたのが、英語という言語を通じて、ヨーロッパやアジア、アフリカなど、いろんな国の人たちと交流できる素晴らしさを実感しました。「神とはなにか、存在するのか」とか、「絶対うそをついてはいけないのか」とか、「正義は立場によって変わるのか」とか話しました。ちょうどイギリスにいたときに湾岸戦争がおこったんですが、イランの人がなんの変わりなく授業を受けて、安全に生活をおくれてたのがすごかったです。英語教員の道に進んだのはこのようなことからです。

―今回取り上げる本を『プラグマティズム入門』にしようと思ったのはなぜ？

私にとって、哲学っていうのが生活していく上での必要なものです。生存戦略っていうか、哲学にふれながら生活していると言ってもいいくらい。今回、『プラグマティズム入門』を選んだのは、哲学が生活に密接に結びついている点を強調したいと考えたからです。プラグマティズムっていうのはアメリカの近代から現在の哲学で、実用主義・道具主義って言われてます。非常に幅広く影響していて、代表選手のチャールズ・サンダース・パースは数学とか論理学、科学の人なんですが、ウィリアム・ジェームズは生理学、心理学、宗教学の人、ジョン・デューイは哲学から教育学、芸術分野におよぶなど、多彩な分野の思想家がこの流れに属しており、日常生活に応用できる哲学が詰まっています。日本では、哲学というとフランスの構造主義やポスト構造主義、ミッシェル・フーコーだったり、ジル・ドゥルーズであったり、ジャック・デリダであったり、フランス系の思想家が取り上げられたり、有名で書籍も多いと思うんですけど、本当は、プラグマティズムもそれに負けないくらい影響力のある思想で、科学や宗教、社会など幅広い分野に接続可能な、非常に実践的な思想です。この実践性や柔軟性が現代において非常に有用だと感じています。そういう実生活に応用をできるっていうような裾野の広い考え方なので、とても日常に近い、日頃考えたりすることに直結しているというので、この本を選びました。

実は、大学で専門に勉強していたのが、デイヴィッド・ヒュームなので、『人間本性論（A Treatise of Human Nature）』にするか、すごく迷ったんです。倫理の教科書では、哲学史でいう17〜18世紀イギリス経験論の最後に現れる人たちが、ロック、バークレー、ヒュームって並ぶんです。その最後の人がヒュームで懐疑論です。彼はもう徹底的に、物理現象についての当時の常識をどんどん否定していきました。その本を読んだカントが「独断のまどろみから目を覚まされた」と言い、自分の考えを改め、『純粋理性批判』という大名著を書いたとされるほどです。確かに懐疑論なんで、その当時の普通、一般的に思われていることは間違ってるよ、違うよっていうのを言っているんですけど。

例えば因果論、「このAという事象がおこったら、結果としてBが起こる。AならばB。」これが絶対的だっていうのがそれまでの考え方の前提だったんです。神が世界をお作りになられたと考えられていたので、それが前提なんですけど、ヒュームは原因結果の関係で必然的なことが何も見られない、何も言えないと言って因果関係の必然性を否定したんですね。例えば、ビリヤードの白い玉を打ったら黄玉に当たる。それが何回も何回も繰り返したら、次打ったらまた当たるやろなっていう繰り返し、反復、恒常的連鎖を当時は因果関係というが、築き上げられた単なる習慣に過ぎない。もしキューで白玉の別のところを打ったら外れちゃうということはあるんだよというのでヒュームは因果性を否定したのです。

―必然性がないというのは、神が世界を創ったと考えている側からすると、許せないことですね。

そう、だからヒュームはその当時無神論者と言われて、だからスコットランド人でロンドンでも働いたけど、フランスに行ったりして。当時からするととても斬新というか。「でも、それって当たり前でしょ」みたいな。さらっと「当たるのか、当たらないのか分からないじゃない」っていうのを言うんです。

現代人の我々からすると常識的な考え方を実はさらっと述べて、それがまあまあ全部それまでの常識の否定になっていくんですけど、その一連の流れとして、最後はマインドの問題があって、人格の同一性、パーソナルアイデンティティという議論があって。

例えば自分に置き換えたら、昨日とか10年前の自分と今の自分って同じって言えるの？身体も10年前はもっと若かったし。10歳の時の私と20歳の時の私と同じ？いやいや、成長してるでしょ？声変わりもしてるでしょ？同じじゃない。

また、10年前のこと10歳のことどんだけ覚えてる？仮に覚えているとしても全部覚えてる？じゃあ、10年前の何月何日のあの時の自分と私と同じって言えんの？言えないでしょ？って言って、身体的特徴とか記憶に基づくアイデンティティっていうのを否定していくわけですね。

だから、心っていうのは結局そうやって連続しているという、後から振り返ってつなげているだけで、同じもの、アイデンティティのある全く同じっていうものは言えないし、必要ないでしょっていう風に言ったんです。

自我っていうのは、心っていうのは、ヒュームの言葉で言うと、「知覚の束に過ぎない。」感じている、考えていることを積み重ね、それを重ねているのをまとめたものでしかなくて。心というのは「劇場」、そういう知覚とか、思考が起こる場所にすぎないんだっていうのを言ったんです。

僕はそれを読んで「あっ、そうか。昨日の自分と今日の自分が同じ必要はないんだ。なるほど。」というふうに捉えられたんですよ。「自分」にとらわれる必要ない。こうあるべきだとか、こうするべき、こうしないといけない、こうあるべきなんだっていう。自分自身っていうのはイメージとして作られたもので、それに縛られる必要はないんだ、人って変わることはできるんだと思った時にむちゃくちゃ楽になったんです。

『プラグマティズム入門』にもどると、近世以降の考え方では、デカルトが言った「我思う、ゆえに我あり」が主流。どうしても自我が世界の中心。でもヒュームみたいに、この本に出てくるパースはそんな自我を否定してるんです。ここに書いてるんですけど、「認識主観としての自我とはまさにそれが生み出した記号の連鎖そのもの」で、「いいかえれば外界と隔絶したコギト（我）としての『私』などない。」自我が最初じゃなくって、記号の使い方、言語の使い方、論理が入って、やっと自我っていうのが目覚めるんです。デカルトは「方法的懐疑」という手法で「コギト（我）」にたどりついたけど、パースはそれを批判して、疑うにしても現実的なところを疑っていかないと何の意味もないって言ったんです。

―プラグマティズムってすごい裾野が広いなと思います。科学と宗教の調和的なものを目指して、実際に役立つかどうかが一番大事だから、手法は科学でも宗教でもOKというか。信仰があって、例えば神様が言ったから、今日は赤いものを持ってたらいいことがあるみたいな。いろいろその信じるものが別だとしても、結果赤いものを持っていた人に利益がその時起きたのであれば、良しという。現代にも、そういう考え方がいるなっていう感じがしました。多様性と言っていいのかわからないですけどね。

そうなんです。パースは、友人だったウィリアム・ジェームズがその宗教の話を言った時に、「君の考えは私のとは違う」っていうので、「君は自分の思想をプラグマティズムと言っているが、それは私の考えとは異なるから、私はプラグマティシズムという言葉を使うことにする」と言って、ほとんどたった一人のよき理解者、友人だったジェームズと別れてしまうんですけど。

プラグマティズムには「何でもあり」という面があります。ひとつの極端な方向を言ったら、リチャード・ローティーは文化相対主義を主張して、意見が違っていても「まあまあ。お互い尊重しよう」って考え方ですよね。わたしとあなたの意見はちがうけど、わたしはあなたを尊重するから、あなたもわたしを尊重してね。おたがいの違い、差を認めて、おたがい立ち入らないようにしましょう、といってるわけです。ところが、その差が広がりすぎて、大きな深い溝になっているのが今の問題でしょう。政治の世界でも、個人的にも不条理な事件とか起こってる。いがみ合い、対抗・対立の状況に陥っていることが問題なんです。

この本に書いてあるように、パースには根本的に何かの普遍的なものっていうのがある。数学的か論理的か記号の世界だと思うんですけど、普遍的な共通のものが土台としてあるっていうのを前提に「神、イデアの世界、観念的な世界とかに頼らないで、もっと現実に即した思考っていうのをしないと意味ないから、そういう共通の土台っていうのを見つけましょう。きっとあるはずでしょ？」ってパースは言っているんだと思います。

多分、プラグマティズムはこの実際の現実の世界から目を背けない、ここをここと違う別の観念的で抽象的な、全然現実に関係ないものが入ってきたりとか、そういうものは持ってこない。それで解決させようとはしないで、ここの場で何とかしよう、上でも下でもなくっていうところにチャレンジする。人間の思考のせめぎ合いみたいなドラマなんです。

――なるほど、非常に難しい。プラグマティズムっていう学問を専門的に学ぶと、どんどん奥深くなるからそうですよね。たとえば、「ダイヤモンドが硬い」ってことも常識ですが、プラグマティズム的には、これだとダイヤモンドは硬いっていう知識を入れたにすぎない。本当に理解するには、ダイヤモンドを何かで叩いてみて、ダイヤモンドが傷つかなければ「ほら、硬いでしょ？」みたいな。

プラグマティズム入門
伊藤邦武
ちくま新書
論理的思考とは何か
岩波新書
言語の本質
今井むつみ
秋田喜美
中公新書

硬いっていう実験の結果を大事にしろ、みたいな感じの理系っぽさもありながら、宗教とかそういうあなたの信仰はもう結果良かったからそれでいいっていう、懐の広さみたいなのがあります。理系の分野でも、答えは1個じゃないとダメ、ひとつじゃないと真理じゃないみたいな感じじゃなくって、いろんな見方をして、正しいことを見つけていこうっていう許容範囲の広さがあります。

例えば、心と脳が一致するのかっていうのとか、還元主義って言いますけど、精神的なものは全て科学的なもので説明ができるとかいう考え方だったりとか、「水槽の中の脳」みたいな思考実験を設定して、自分が「水槽の中の脳」だったらどう感じるかとか、具体的に考えようとします。自分がもし水槽の中の脳だけで、実は電気信号で情報をあたえられているとしたら、それは世界を意識していることになるかという問いを立てて、議論して、いろんな考え方、視点が生まれて、具体的に思考が活性化されて、それで応用も効いて。他の科学やったりとか、もちろん社会やったりに関わりがあるので、とても幅が広い分野なんですよね。

――このプラグマティズムいうものの考え方を現代に生きる人にもう何か有用性がある考え方だよって感じでおっしゃってたんですけど、生徒がそのプラグマティズムに触れることでどういうことを期待していますか。

プラグマティズムっていうことに限らなくても、哲学が何かを考える、疑問に思っていることとの処方箋だったり、別の視点でハッと気づき、こういう風にも考えられるんだみたいな引き出しになればいいなって思ってるんです。自分なりの答えを見つけていくんだっていうもの。1つのプラグマティックな、思考ツールっていうのになると思うんですよね。その根本として、僕はプラグマティックでありたいと思っているんですよ。

哲学って結局そういう行為・行動だと思うんですよ。中高生の年代って、「なんで生まれてきたん？」とか、「自分の人生に意味あんの？」とか、そういう問いが日常的に出てくる人が結構いるんだと思います。心理上、哲学っていうことが日常に引っ付いてるんだと思うんです。だから、それを広げていってほしいと思ってこの本なんです。

特に今の中高生の生徒たちって、哲学的な問いが身近にあると思うんです。現在はいろんな面でぐちゃぐちゃで、カオスの状態。なにがよくって、なにが悪いかなんてはっきりしてなくて、あらゆる分野で「絶対にこれだ」って言えるものがなくなってる。ユークリッド幾何学やニュートン力学が絶対に正しかった数学や物理学でもそうですよね。そんななかで生きなきゃいけない。そんな生徒たちにとっての助け、ちょっとちがったところから景色をながめられる踏み台になってくれたらいいなあって思っています。

――大阪国際中学高等学校の在校生がこの『プラグマティズム入門』を読むことによって、どんな風になってほしい？

「これってほんまに当たり前？」「なんでこうなってんの？」っていう問いかけができるかどうか。「嫌だ」とか「ありえない」って言って止まっている状況だとして、その状況を意識化できるかどうかっていうのが成長だと考えます。例えば、14歳の時点で「なんでやねん」ってことに出くわして、何で嫌なのか、それは生理的に無理だから、とか。それを客観視して、意識化して、言語化できるようになれば、それがその子にとっての成長なんですよ。それを哲学に触れることで、できたらこの本を読むことでそうなっていってほしいと思います。けど、難しい用語多いし、まず専門用語の勉強からしないといけないかもしれません。そこは敷居が高いんですけど。

――総合的な探究の時間の授業とかお手伝いして、社会的な問題について扱っても、なかなか当事者意識がないというのか。他人事として見ているから、生徒たちの視野をどこまで広くできているのか、いまいち分からないところがあります。例えば、ここ最近で多様性っていう言葉がなんかこう一人歩きしすぎていて、ありがちなところなんですが、差別とかマイノリティに対しての意識っていうのは一歩引いて「こういう人たちがいるんですよ」みたいなノリで喋ってる人が多いです。

総合的な探究の時間にしても、SDGsにしても、なかなかそのレベルまで落とし込めていない部分があります。型にはまった考え方、テンプレートに沿って活動を進め、大人が期待する、予想できるような結果を求める。それでは本当に生徒たちが自分で考えることができない。そのチャンスを奪っているように思うんです。もっと自由におもしろいこと、思っていること、不思議なことを深められるのが本当だと感じます。時間がない、というのは言いわけなのかもしれない。教育全体が「ランチセット」になってしまってる。

SDGsにしても、「SDGsって大事なんです。あなたは○○の目標についてどんな取り組みができますか」ってことになりがち。その前に、「SDGsって何？」、「持続的な開発って必要？」、「誰がどうやって10個強、17個ですか、目標を決めたん？」、そんな問いがあってもいいんです。国連が言っているから、政府が言ってるから、役所が言ってるから、だから大事なんで、だからやるんだ、っていうのは安易で、その方がお得で、迷わないでいいからやってるだけになってるような気がしています。そこは、日本の教育者として、反省するところでもあります。

――哲学って、こういう考え方をこの人がしていて、有名な本はこれ！みたいな感じで覚えるだけで、テストでそれを書いたら点数取れるけど、そうじゃなくて「哲学ってこういう考え方があるよ。では、この議題についてその考え方で考えるとこういう考え方の答えが出るよ。同じ問いに対してこの考え方をするとこ

ういう答えが出るよ。」みたいな話とか、プラグマティズムだって、南北戦争が明けてすぐの時に生まれてるっていうところとか。己を考える大きな事件だったわけじゃないですか。民族とか物の考え方、宗教とは？自己とは？って考える波がバサッてきたから勃興してきたわけですよね。

もう一つ、学問レベルでもっと面白い話が展開されてきたんですけど、上辺だけの勉強にしてほしくないってのはあります。これも、私個人は学校教育の問題だと思ってます。例えば、残念ながら高校の段階で量子って出てこないですよね。でも、量子論って100年前以上前に生まれていて、今では日常で使うものに応用されて、東大の古澤教授は量子テレポーテーション使った量子コンピューターが世界最先端レベルなんです。そういう国で、そういう土壌があるにも関わらず、なんで高校レベルで量子を扱わないのか、とても不思議、疑問なんですよ。ＰＨＰ文庫で「『量子論』を楽しむ本」とか、量子論について書かれた面白い本があるわけだから。ほかの教育内容も本来はもっとアップデートをしていかないといけないと思います。今の教育は果たして今の中高生のニーズに合っているのか疑問です。

――結局大学に入って勉強したり、社会人になるのに就職活動とかした時に求められるのって、自己をどんどん考え分析したかで、そして社会との関わりなどを問われるんです。どう関わるかって急に聞かれて、ちゃんと自分の言葉で書けるのか。実際は自己分析してないし、それを社会に広げるっていうことをしてない。社会の前に哲学があるから、社会を考える前に哲学が必要なわけで。私はこういう思考方法が得意で、では、それにぶつけていける社会のものはなんだっていうのが哲学から学べるはずなんです。多分、今の子たちは私たちの世代とかよりは自己分析を楽しめる世代なんかなっていう風にも思います。

本当にその通りで、自分で考えることが本当に大事だと思います。最近のはやりで、ロジカルシンキングってよく言われてますけど、論理的に考えることも文化によって変わるんです。岩波新書で出てる『論理的思考とは何か』って最近出たベストセラーの1つです。著者の渡邉雅子さんが論理的思考で言われているのは、結局英語的な発想の論理思考で二項対立の思考なんだけど、実は、文化圏によって論理というのは違うんですよね。

英語と日本語とフランス語とイランのペルシャ語の4つの言語を比較して検討して述べているんですが、僕も英語で文章を書いて思うんですが、使用言語によって思考パターンも全然違うんです。私の経験でいうと、留学してたときにエッセイやレポートを英語で書いたんですけど、提出するたびに「no argument」って言われて苦しんだんです。どの言語をバックグラウンドに持つかで発想が言語によって固まってて、論理が文化圏で違う。

英語っていうのは2項対立で、AじゃないならBだよ、で終わりなんです。ところが日本語の論理っていうのは時系列でこうなって、こうなって、こうなって、こうなるって話をするんですよね。それは論理的だけど英語的な論理的ではない。日本語ではそういう発想をするからＡＢ、ここで終わらずにその前のＸでありＹでありＺという風にたどっていける。授業でもよく生徒に言うんですけど、英語を勉強すればするほど、日本語を大事にしてほしい。日本語をしゃべれるのは、世界的にはおおきなアドバンテージなんです。根本的なところをたどることができ、その筋道が見えられるのが日本語的発想なんです。だから根本的な解決とかいうのが実際にできるのは日本語の思考だっていうので述べてはるんですけど、そういうねメリットというかアドバンテージが日本語にはあります。

――フランス人の友だちがいて、村上春樹が好きなんだけど、その友だちは村上春樹の本を英語訳で読むらしいんです。実はフランス語訳と英語訳では、倍近くフランス語訳の本が厚い。フランス語って言語の特徴とでも言いますか、長いんですよ。まわりくどいと友だちは言ってましたが。笑。英語の方が端的に書いているんです。でも、私は、日本語の村上春樹の作品をより忠実に訳しているのは、フランス語訳ではないかと思うんです。では、友だちは本当に春樹が好きなのか？彼の良さは英語訳だとちゃんと伝わるのだろうか。世界に春樹のファンって結構多いって言うんですけど、やっぱ言語の文化ってそこにあるから、本当は日本語で読めたら本当の村上春樹の気持ちとか描写を堪能できるんだろうなど。

友だちはフランス語版は余計なものを足しているんじゃないか、言うわけです。そのフランス人は国語でそんなにいっぱい作品を扱わない。『レ・ミゼラブル』を長く扱うだけだと言います。それも全然縮小してないやつをずっと読まされるんですって。それを聞いた時に、私はもしかすると私が読んだ『レ・ミゼラブル』はフランス人が読む『レ・ミゼラブル』とは違いのかもしれない、と思ってしまいました。

社会があって、文化があって、そこに生まれて家族とか人に囲まれて育っていく。文学であったり、新しく学ぶ言語であったり。そんな周りの世界があるから自己っていうものがあって、いろんなものを社会から与えらて、それを享受していくから人によって違う。そこがまた面白いわけで、そこで議論できるから面白いんですけど。

さっきの話にもどるんですけど、総合的な探究の時間の話がありましたけど、本当の意味で探究してほしいんです。スタートが固まってないのに、自分に問いがないのに「じゃあそうしましょう」って終わるのはどうかと。大人たちが描く世界のおしつけでしかない。

――かっこいいスライドを作って、かっこよく発表して、社会的にいいねって言われる意見を出したい。でもそれって探究なんですか？と思うことがあります。他人事ではなく当事者として、ちゃんとディスカッションをしているか。ちゃんと納得しているか。

探究っていう言葉自体がすごい抽象的ですしね。大人たちが考える範囲で自由にしてねって感じ。なんちゃってエリートを作るシステムみたいな感じがして。どの学校でも結構詰め込みをするから、そうすると流れ作業になっちゃうんですよ。評価するポイントがあって、みんなそこをクリアするためにやる。逆に言えば、ポイント以外のところは流す。

やっぱり少人数で、あーだこーだ言いながら、自主的に能動的にプロジェクトを進めていく。その過程で、気づく視点とかを大切にしたい。テーマについて考えることを繰り返して、より深く掘り下げることがいいと思うし、そういう時に役立ってくるのが哲学とか物の考え方であって、それらを磨いていけるか。疑問を持って、自分の考えを他の人に伝えて、能動的に動けるか。中学・高校はその考え自体を養っていくところでもあるのです。そりゃ受動的な方が楽ですし、「あの人が言いました」っていう方がもう効率的だし、コスパもいいんですけどね。

結局、知識・真理っていうのは、バージョンアップ、アップデートしていくもんなんです。プラグマティズムによると、絶対的に正しいっていうものはなくて、それを探し求める探求っていうのをジョン・デューイとか言ってるけど、探求の過程から真理が生まれることっていうのもあるので、自分のことも相手のことも、何か起こっても絶対視することがなく、「なぜそうなるんだろう」って、やっぱり一歩立ち止まって考えられるような人になってほしい。その導入としては『プラグマティズム入門』はちょっと難しいですけど、ちょっとでも読んで、こんな考え方あるのかって知ってほしいなと思います。

インタビュアー
大阪国際中学校高等学校 図書館司書
株式会社 紀伊國屋書店 角井 貴乃